

# 經濟論叢

第七十九卷 第二號

---

- 戦後の国際労働組合運動展望……………平田 隆夫 1
- 蒙古民族の商業について……………伊藤 幸一 22
- 国民經濟バランス論……………高 昇 孝 39
- 

昭和三十三年二月

京都大學經濟學會

## 蒙古民族の商業について

——特に元朝の成初期前後をめぐりて——

### 一

元朝の成初期ころにおける蒙古民族は、商業を重んじたと言われる<sup>1)</sup>。

それは、当時の彼等が、他の民族からいろいろな物をほしがったからであろう。

では、なぜ、彼等が他の民族からいろいろな物をほしがったのだろうか。

それは、彼等の生業に問題があるからであろう。なぜならば、彼等は狩猟または遊牧の民族である。当時、彼等の生産力が発達したと言われるが、やはり狩猟または遊牧の範囲をててはいない。ところが、狩猟または遊牧による生産だけでは、彼等の必需物資のすべてを充たすことはできない<sup>2)</sup>。従って、どうしてもほかから補充しなければならぬ。だから、彼等が、他の民族から必要な物をほしがるのに不思議はない。

だが、もし、彼等が他の民族からいろいろな物をほしがる所以を、彼等の生業に求めるのならば、ただに、当時だけにあてはまるものではない。彼等は、古くから、狩猟を生業とし、また、遊牧を生業としている<sup>3)</sup>。従って元朝

の成立期以前の段階でも、同様なことが言えよう。

事実、彼等は、早くから、交換経済を發達させた民族として知られている。だから、早くから、大なり小なり他の民族から物資を求めていたのに違いない。

それでは、特に當時の彼等について、そう言われる理由は、どこにあるのだろうか。

それには、先づ、太祖が、非常に互市を開きたがったことを挙げなければならぬだろう。元史訳文証補には、太祖が再三締交通商を求めたことが記されている。また、王考通氏は、『太祖の西域征服は、実は最初の願いでなく、求めるに急なるものは、専ら互市を開くことにあつた』と言っている。つまり、太祖が、非常に、西域の物資をほしがっていたことを示している。

次に、當時、彼等が入手した物資を見ると、非常に数量的にも種類的にも増大していることを挙げなければならぬ。当時、彼等が、他の民族から求めた物資を大別すると、必需品と奢侈品の二つになる。ところが、言うまでもなく、必需品はいつの時代でもなくてはならないものである。従つて、當時の特色は、必需品において見出し難い。これに反して奢侈品は、奢侈の傾向が現れなければ、特に求めようとするものではない。また、奢侈の傾向は、いつも現われるものではない。しかるに当時、この傾向が顕著に現れてきている。けだし、それは、当時、彼等が再三掠奪を行い、掠奪品の中に予期していなかつた奢侈品を得る。ところが、それらは彼等にあつては珍らしい。そこで、次第に、それらを好んで求めようとするようになる。従つて、掠奪する場合においても、それらを得ることの一つの掠奪の目的となる。掠奪においてだけでは足りない。貢納または納税の形においても、各所からいろいろ珍物を納付さすようになる。また、貨幣を用いていくらかでも買おおとする。つまり、奢侈の傾向が高まってくる。この

傾向は、当時の特色と言えよう。なお、この傾向が現れるときにおいては、必需品は充たされているものと考えてよからう。そうすると、当時においては、彼等の入手物資が、数量的にも種類のにも増大したことがわかる。

さらに、当時、彼等が貨幣をさかんに用いて諸物資を買い求めるようになったことが挙げられる。彼等は、貨幣は既に早くからもつていたが、それは羊馬などの地産貨幣であった。ところが、当時に至って、彼等の貨幣は金銀などの外来貨幣を用いるようになる。つまり、当時、彼等の貨幣が非常にふえた。そして、彼等はそれらの貨幣を大いに活用した。

以上の理由などによって、特に、当時の彼等が、他の民族からいろいろな物をほしがったと言われるのだろう。<sup>16)</sup>

- (1) 王考通「中国商業史」一四七頁—一四八頁。
- (2) ウラヂミルトフ「蒙古社会制度史」外務省調査部訳、九三頁—九四頁。
- (3) ドーンは(ドーン「蒙古史」岩波文庫版訳、上巻、六〇頁)『家畜は殆んどその総ての需要を満せり。』と記している。しかし、家畜だけで彼等の自給自足が完全の域に達するには程遠い。例えば歴史に徴しても、遊牧民は古くから粟や黍などの穀物を食している。(後藤十三雄「蒙古の遊牧社会」二二二頁。その他)
- (4) ドーン「蒙古史」前掲書、五三頁。
- (5) マルクス『資本論』長谷部文雄訳、二八六頁。(第一巻・第一分冊)
- (6) 洪鈞撰・元史訳文証補、卷二十二上、西城補伝上。
- (7) 王考通、前掲書、一四八頁。
- (8) 例えば、当時、金を絹織物を用いたり、(The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55. [Translated from the Latin: by William Woodville Rockhill] p. 70.) 又、葡萄酒をはじめ色々な酒を嗜んでゐる(拙稿、経済論叢、第七五卷「一九五五年」第一号、二六頁)などは、奢侈の傾向が現れていることを示してゐる。

(9) ドーソン、前掲書、第一編第四章参照。

(10) 例えば、ドーソン、前掲書、上巻、一三〇頁に、『蒙古人は北部三省において錦繡絹布幼年の男女家畜四等を夥しく鹵獲せり。』云々。

(11) 彼等は貴重品として、例えば葡萄酒なら大廟におせなえする。(元史、世祖の紀、至元十三年九月己亥の条に、享干大廟常饌外、益野家、鹿、羊、葡萄酒とある)

(12) 例えば、ルブルックは『高価な織物がなしたので彼は不満足な顔をした』と伝えてゐるなどは、(The Journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.), p. 86) それを示して云ふ。

(13) The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.), pp. 156-157.

(14) 拙稿、経済論叢、第七十六卷(一九五五年)第五号、五四頁—六七頁。

(15) なお、この他の理由として、元朝の成立期以前の資料が殆んどない。だから、当時以前の彼等については推測の域を越えない。ところが、当時に至って、俄然彼等に関する資料が現れ始める。従って、恰も当時以前では見られないが、特に当時に至って現れた彼等の傾向のように見える憂いがある。だから、特に当時の彼等についてそう云われるのかも知れない。

## 二

元朝の成立期前後において、特に彼等は奢侈の傾向に陥った。従って、彼等のほしがる物が増加した。だから、当時の彼等は、いろいろな物をほしがったと言われる。しかし、彼等がいろいろな物をほしがったと言うことと、彼等が商業を重んじたと言うことは、必ずしも同一ではない。

即ち、当時、彼等は貨幣をもっている。従って、彼等のほしいものは、その貨幣で買える。だが貨幣で物を買う行為か、いつの場合でも商行為であるとは限らない。げんに、黒韃事略に、『韃人只是撒花、無人理会得買販』と

ある。だから、当時の彼等が、いろいろなほしい物を買う場合、それらは商行為ではなかったことがわかる。しかし、彼等は、早くから交換経済を発達させた民族として知られている。<sup>2)</sup> それなのに、元朝の成立期に至っても、まだ、商業を知らないとするのは、一見、不思議に思えるだろう。

それは、どう解すべきであろうか。

先づ、彼等の生産力に問題がある。彼等が交換経済を発達させた民族と言われるのは、彼等が遊牧民族であるからであろう。遊牧民族ならば財産はみな動産であり、また、移動性に富む。従って、彼等は交換経済に入り易いと見るところに無理はない。しかし、彼等が交換するためには、余分の家畜<sup>3)</sup>乃至はその加工品が必要である。ところが、それらがいつでもあるほど彼等の生産は安定していなかった。とくに、自然の制約をうけて、時には、余分の家畜どころか、彼等の生活に直接必要な家畜さえ得られないことも起る。殊に、古代において、いわゆる『蒙古的な遊牧』を行っていたころにおいては、そうなりやすい傾向にあったのではなからうか。<sup>4)</sup> だが、そうなれば、たとえ農耕民と平和な交換が行われていても、それは、萎縮乃至は停滞するであろう。しかし、彼等が生きるためには、必要な諸物資をどうしても得なければならぬ。そこで、必要なものを無理矢理にとろうとする。つまり、掠奪が行われる。<sup>5)</sup> その場合、彼等は、農耕民族の諸生産物も掠奪しようとするが、遊牧民族同志でも他の集団のもっているものを取ろうとする。そうになると、互いに掠奪しようとし、また、掠奪されまいとして、次第にいわゆる「戦時的体制」を整えよう。だからそこには、ますます平和な交換は後退するであろう。また、そのようなときには、たとえ生産が一時的にふえても、急激に平和な交換は行われがたい。従って、彼等の剰余生産物の交換は気まぐれに行われることがあっても、また退化する。だから、彼等は早くから交換を行ったかも知れないが、当時においてさ

え、また、商業が行われるほどにまで至らなかつたのだから。

次に、彼等が極めて保守的であるところに問題がある。例えば、彼等が遊牧する集団の血縁関係を、純潔に保とうとする点<sup>7)</sup>などによつても、それを推測するに足るであらう。このような傾向は、シャマニズムを信念の支柱とする彼等にとつて、当然のことであらう。ところが、この保守的な傾向は、旧習にのみ従つて彼等の生産様式の革新をさまたげ、彼等の發展性を阻害するのではなからうか。げんに、彼等の経済は、農耕民族から穀物などを得ることにおいて成り立つ。だから、遊牧史はじまつて以来農耕民族との交換は行われていたのに違いない。しかるに、この農耕民族との交換形態は、匈奴あるいはそれ以前のころから元朝の成立期前後に至るまでほとんど變つていないように思える。彼等は、ただ、血縁関係において成りたった集団みづからが、集団に直接必要な物資を得るために、農耕民族と交換したのにすぎない。それは、あたかも彼等の生業の一部として、遊牧民族のどの集団でもそれぞれで行つた。従つて、そこには、分業の起る余地もなからう。彼等がそうしたのは血縁関係によつて成り立つたいわゆる民族的な社会関係<sup>10)</sup>を維持しようとし、旧習に従つて生業をかえようとしなない、いわゆる彼等の保守的な傾向が、非常に強いからではなからうか。だから、彼等は、非常に早くから農耕民族と交換しておりながら、まだ、元朝の成立期前後に至つても、その交換形態を特に發達さすほどにまで至らなかつたのだから。

遊牧民族同志における集団間の交換、および、彼等の集団の内部における交換についても、遊牧民族と農耕民族との交換が行われているときには、やはり行われただろうが、それらの交換も、およそ商業とは縁遠い物々交換であつたように思える<sup>11)</sup>。しかし、これについての資料は殆んど見出されない。

- (1) 拙稿、經濟論叢、第七十六卷（一九五五年）第五号、五四頁―七〇頁。

- (2) マルクス、前掲書、(第一巻・第一分冊)二八六頁。
- (3) 彼等が直接生活に必要な家畜以外の家畜、つまり、剩餘生産物のこと。
- (4) 特に氣候の制約をうけた。例えば、漢書、匈奴伝(五省局二十四史、漢書九十四、匈奴伝、第六十四、上)に『其冬匈奴大雨雪、畜多飢寒死云々』とある。そうなれば生産は極めて減少することが推測できよう。
- (5) 古代において蒙古民族の行つてきた遊牧はこの蒙古的な遊牧であろうが、それは、牛を主な家畜とする遊牧を指し、トルコ的な遊牧、つまり馬を主な家畜とする場合にくらべて、いろいろな点でやや劣っていると云われる。彼等は元朝の成立期ころにおいて、このトルコ的な遊牧をとり入れる。従つて、彼等の生産力は發達したのではなからうか。
- (6) 長春真人西遊記に『太師先居之、以回紇艱食盜賊多有、恐其变云々』とある。だから掠奪は、生産力が低下したときなどには、特に行われるものと考えられる。
- (7) ウラヂミルツォフ、前掲書、一一七頁。
- (8) 拙稿、經濟論叢、第七十五卷(一九五五年)第一号、三六頁—三七頁参照。
- (9) 詳細な資料はないが、遊牧民族が匈奴のころに商業をした資料は見出されない。金朝のころでも物々交換は行われたが、商業は行われていない。(鄭行巽「中国商業史」一三四頁にはそれを指摘している)また、さきにも述べた如く黒韃事略にも「韃人只是撤花、無人理會得買販」とあるから、当時においても彼等の交換は商業ではなかつたものと思われる。従つて、それらは直接必要物を得るためのものと考えてよからう。
- (10) 氏族社会が崩壊し始めるのは十一、二世紀ころであるが、(ウラヂミルツォフ、前掲書、一四二頁—一四三頁)十二世紀においても彼等の遊牧地は、個人的所有になつてはいない。(ウラヂミルツォフ、前掲書、一三二頁)つまり、十二世紀ころにおいても、まだ共同生活の名残をとどめている。しかし、内田氏(内田吟風「匈奴史研究」二四七頁)も指摘しておられる如く、既に、匈奴のころでも家畜は個人の私有財産であつた。だから、次第に一つの氏族から幾つかの家族も派生したものである。だが、やはり、民族的な社会關係を基調としていた。(松田寿男・小林元「乾燥アジア文化史論」一三〇頁)
- (11) 青木富太郎「蒙古の民族と歴史」一六六頁。

かくて、蒙古民族は、元朝の成立期前後においても、まだ、商業を知る段階にまで至らなかつた。しかし、それにもかかわらず、当時の彼等は他の民族からいろいろなものを求めている。では、彼等は、それらのものを、どのようにして補給したのであろうか。

それは、場合により様相を異にする。だから一概には言えない。しかし、これを、比較的前期における場合と、比較的後期における場合との、二つに大別して考察することができよう。

まづ、比較的前期における場合についてみれば、主として、未征服地との交易と掠奪の二つによって供給されている。この供給源の第一に考えられるものは金朝である。例えば金史、食貨志に、命權場、起赴南京、国初於西北招討司之、燕子城、北羊城之間管置之、以易北方牲畜とある。従つて、金朝から蒙古へ諸物資が供給されたことが推測できよう。こうして交易によって得る以外に、彼等は掠奪によって得たものも少くない。殊に当時においては、彼等の生産力は極めて低い。だから、彼等に剰余物資は殆んどない。従つて、金朝との交易も長期にわたつて行つたわけにはいかないだろう。次第に交易に代つて掠奪を行うようになったものと考えられる。当時、彼等が掠奪したのは、大体、南方の西夏や金朝からであろう。

次に、比較的後期における場合についてみれば、主として、貢納もしくは租税や、交易することによって供給されている。この貢納もしくは租税による物資の供給は、彼等の征服地が拡大されるにつれて、次第に広範囲から得られるようになる。また、彼等の政権が確立されるにつれて、税制も確立された。税制は、主として西域には人頭

税を、また、漠地には均等戸別税を課すようになる。この貢納や租税による供給以外に、当時、交易による供給がある。それは、比較的前期における場合の如く、主として金朝に限られると言ふようなものではない。非常に広範囲に及び、また、非常に遠隔地の物資でも得ることができた。ルブルクは、当時、供給される諸物資が、支那及び其の他の東の国々から、ベルシヤ其の他の南の国々、さらには、ロシア・モクセル・大ブルガリア・パスカティールと言われる大ハンガリア・ケルキスなどに及ぶ極めて広大な地域から得られたことを伝えている。

では、それらの供給によって、どのような物資が得られたか。

まづ、比較的前期の場合においては、金朝との交易においては、例えば、金史、食貨志には、<sup>3)</sup>権場互市用銀とある。だが、金朝は、彼等と交易するのに銀だけを用いたのではなからう。<sup>4)</sup>恐らく彼等に必要な穀物や絲帛なども用いたのだらう。つまり、金朝との交易においては、穀物や絲帛や銀などを得たものと思われる。次に、掠奪によって得たものを挙げれば、主として、家畜・帳幕・婦人・穀物・貴金属品・絲帛・武器などが挙げられよう。<sup>5)</sup>しかし、いつの掠奪においても、これらの物がみな得られるのではない。ときには、彼等がほしい物を充分得られることもあるが、また、全く予期しなかった物を得るだけにとどまることもある。

次に、比較の後期において彼等が得たものは、貢納もしくは租税として、銀を中心とする貴金属・酒類・絹織物・食糧・製鉄材及び斧など、<sup>6)</sup>その種類は少くない。これらは、掠奪の場合とは異り、いつも大体きまつて得ることができる。この貢納や税によって得る物以外に、当時、買って得たものも少くない。彼等が買って得たものは、奢侈品が多い。葡萄酒や密酒などの酒類・貴金属品・絹織物などはそれである。<sup>8)</sup>だが、穀物などの生活必需品も全く買わなかったのではない。<sup>9)</sup>さきに述べた如く、当時、彼等がこうして得た物資の種類は極めて多い。

このように、当時彼等の得た物資が多いのは、ただに貢納や税や農耕民族との共棲関係からおこる交換だけではないからである。当時、商人がその大きな役割を果したことを見逃すことはできない。だが、彼等の中には商人はいない。だから、それらの商人は他の民族の商人である。これについて、例えば黒韃事略には、漢児及回回等人販入草地とある。また、長春真人西遊記には、西域賈胡以囊駝負至とある。従って、それらの商人は、漢人や回回人や西域人であったことがわかる。

これらの商人達は、元朝が成立するにつれてますます活潑に活動した。殊に、商業に天資を有するといわれる西域人は、千里の道を遠しとせず、極めて遠距離からも諸物資を持ち運んだ。

- (1) 金史、卷五十、志第二十一、食貨五。
- (2) *The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.); p. 70.*
- (3) 金史、卷五十、志第二十一、食貨五。
- (4) 例えば統文獻通考鈔、卷之六、市糶考、市舶互市の章宗承安二年の条に、樵場初金主雅謂、夏国以珠玉、易我絲帛、是以無用易我有用とある。従って、蒙古に対しても絲帛を用いたものと思われる。
- (5) 特に穀物などは、遊牧社会ではどうしても得なければならぬ。古きは匈奴の頃から隣接する漢民族などから得ている。だから、当時だけ穀物を与えないことはなからう。
- (6) ドーン、前掲書、第一編、第二章及び第三章参照。
- (7) *The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.); p. 47, pp. 156-157.* 及び、拙稿、経済論叢、第七十五卷（一九五五年）第一号、二五頁—三二頁参照。
- (8) 註(2)と同じ。更に拙稿、経済論叢、第七十五卷（一九五五年）第一号、三〇頁—三二頁。
- (9) *The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.); p. 68.*
- (10) 布施知足「イランと支那文化」九頁。

## 四

ところで、当時、これらの商人達が、非常に遠いところからでも、彼等のところへ諸物資を持ち運んでくるようになったのは何故だろうか。

それは、先づ、第一に、戦乱状態にあった草原地帯及びその周辺が、彼等によって平定され、通商路の治安が維持されたからである。新元史、食貨志に、先是太祖晩年、博州行之師府事、何実、因兵燹後百貨不通とある。ところが、彼等が征服することによって、世は平靜をとりもどす。そこで、彼等は駅站制度をつくり、互市をたてるなどによって物資の流通をはかった。飯塚氏は、彼等がそうしたのは、モンゴル政権が、通商路の治安の維持者であったからだとして居られる。だから、商人達は、彼等のところへくるのに危険を感じることがない。

第二に、蒙古内部において、次第に商品生産が発達したからである。当時、次第に生産力が発達する。従って、剰余生産物も得られるようになる。この剰余生産物は、どうするか。彼等は、それが、誰にも有用なものであることを知っていた。だから、それが必要なものと交換した。黒韃事略には、其貿易以羊馬云々とある。つまり、彼等はそれを商品としたのである。また、さらに、以羊馬博易之とある。従って、彼等のその生産は、次第に意図的に交換の目的をもってさかんに行われたことがわかる。つまり、商品生産が発達したことを示している。

第三に、彼等の経済が、外部に依存しているからである。殊に、農耕民からは、どうしても彼等に必要な穀物などを得なければならぬ。だから、農耕民に依存する経済が成立する。そこで、互市を要求し、朝貢を強制する。また、大挙万里の長城を突破して、中国農耕民を劫掠する。後藤氏は、それは、彼等の交易の異なる形式だとして

おられる。前漢書、匈奴伝に、南有大漢、北有強胡、胡者天之驕子也、不為小札以自煩、今欲与漢國大関取漢女為妻、歲給遣、我藥酒万石、稷米五千斛、雜繒万匹、它如故約則不相盜矣とあるのは、氏の説を裏書するものといえよう。この游牧民と農耕民との關係を、羽田氏は、共<sup>シ</sup>關關係だと言つておられる。これらはいずれも、彼等だけの閉鎖的な自給経済では成り立たないことを示している。

第四に、当時、特に彼等の支配的地位にある者達が、奢侈の傾向におちいつたからである。当時、生産力の発達によつて、物資が豊富になる。従つて、彼等の生活水準は高くなる。生活水準が高くなれば、必需品の質的向上が見られよう。例えば、黒韃事略に、其服右衽而方領、旧以氈毳革、新以紵絲金線云々とある。つまり、彼等の生活が華美になる。しかし、彼等にとつては、それらはもはや必需品である。だから、どうしてもそれらを得ようとする。例えば、元史訳文証補に、太祖嘗遣西域商三人、賚白駱駝、毛裘・麝香・銀器・玉器、遣貨勒自弥王、願与之締交通商、貨勒自弥王如約、太祖又命親王諾延等出賈人隨西域商賈西行、購其土物、貨勒自弥、疑為蒙古細作、拘而殺之、惟一人逸帰、太祖始有用兵之意とある。また、ドーンも、『彼等が、如何なる商人に対しても快く資本を貸与したことを伝えている』これらはいずれも、彼等が奢侈の風に流れたからである。

第五に、彼等が、商業を知らなかったからである。もし、当時、彼等の中に商人がいたならば、彼等の経済が物資の補給を必要とし、彼等の支配的地位にある者達が奢侈の風にながれて諸物を求めようとするから、その商人達は忙がしく活躍したにちがいない。ところが、彼等の中には商人はいない。さいわい、非常に商業にすぐれた漢人や、回回人や西域人などの商人達がいた。従つてそれらの商人達が大いに活躍することになったのである。

第六に、これらの交換は、商人達にとつて、極めて有利であつたからである。商人は、もうけがないところにお

いては、活躍するものではない。商人達が、当時、非常に活躍したということは、極めてもうけがあったことを意味する。何故もうけがあったか。それは、先づ、蒙古人達が商業を知らなかったからである。従って、商人達はいなりになる。加うるに、商人達のはこんでくるいろいろな珍物は、彼等に非常にもてた<sup>1)</sup>。だから、それは、商人達にとってみれば、この上ないことである。ほろもうけができた。従って、物資をはこぶについての多少の苦難くらいいへでもないことであろう。商人達は、争って彼等の喜ぶものをはこぼうとするだろう。

第七に、当時、大陸を横断する東西の交通が発達したことも挙げられよう。大陸を横断する東西の交通路は、元朝の成立期以前においてはあまり発達していなかった<sup>1)</sup>。ところが、さきにも述べた如く通商路の治安維持者としてたつたモンゴル政権によって、それまでであった民族的障壁や、地理的障害は、次第に除去され、大陸を横断する東西の交通路網が完備した。天山南路や天山北路などはそれである。なお、元史の站赤の項は、よくそれをうかがわしめる。

- (1) 新元史、卷七十四、志第四十一、食貨志六、鈔法。
- (2) 例えば、続文獻通考鈔、卷之六、市糶考、市の項に、世祖中統元年、置互市云々とあり、また、同じく市舶互市の項に、世祖中統四年正月、詔立燕京平准庫、以均平物価、通利鈔法とある。
- (3) 飯塚浩二「世界史における東洋社会」共一章、八節。
- (4) 後藤十三雄「蒙古の遊牧社会」二二三頁。
- (5) 前漢書、卷九十四、上、匈奴伝。
- (6) 一九五四年四月二十四日の研究発表会（『中央アジアの遊牧民と農耕民』羽田明氏）において発表された内容。
- (7) 元史、卷一、本紀第一、太祖十四の条には、これについて、ただ夏六月、西域殺使者帝親徒とあるだけである。
- (8) ドーソン「蒙古史」前掲書、下、六六頁。

(9) 成吉思汗実録、那珂通世訳註(五八二頁)によれば、太宗が商人を励まし、彼等のもとえ諸物をもつてこきそうとして、商人のもつてくる品物を高価で買ったことを伝えている。それは、彼等が商人達のもつてくる諸物を非常にほしがったためと思われる。

(10) 秋貞実造(田村実造氏の前名)「宋元時代の東西交通」(東洋文化史大系、宋元時代〔九〕)一三一頁。

## 五

元朝の成立期前後において、蒙古民族は商業を重んじたと言っても、それは、主として彼等の支配的地位にある者達が、奢侈の風にながれていろいろな珍物をほしがり、他の民族の商人にはこぼせてそれらを買って喜んだことを意味するだけであつて、すべての蒙古人達がそうしたわけではない。

それにしても、彼等の支配的地位にある者達が、商人から買った諸物資はあまりにも高い。それは、あたかも利害得失を無視しているようでもある。彼等は、何故そんなにまでして買ったのだろうか。

それは、さきにのべた如く、彼等が、商業を知らないから、商人の言いなりになつてしまふからではあるが、そんなに支払う財貨を、彼等は どうして得るのだろうか。それは、なんのことはない。納税などにおいて搾りあげればわけなくできる。だから、支払うための心配はいらない。従つて、ほしいものならいくら高価であろうと、また、如何に多く求めようと何ら意に介することはない。彼等が、利害得失を無視しているが如くに高価に買いあさるのは、このためであらう。

しかし、納税する者達にとつてみれば、並たいていのことではない。当時、納税しなければならなかつたのは、

一般の蒙古人だけではないが、ウラチミルツォフは、当時、課せられた税がおもくて、日々の暮らしに困っている蒙古人のことについて記している。従って、一般の蒙古人達に対しても、重税が課せられたことが推測できる。殊に、当時は、生産力が発達し、剰余生産物が多くなっている。だから、多少の税の負担ぐらゐは生活をおびやかすほどにはならないはずである。それにもかかわらず、日々の暮らしに困ると言うことは、非常な重税であったにちがいない。当時の彼等の剰余生産物だけでは、重税をまかないきれなかったのだろう。

そうすると、当時、いろいろの珍物を実際買ったのは、支配的地位にある蒙古人ではあったけれども、暴利をむさぼる商人達に対してそれらの支払いに当ったのは、納税しなければならぬ一般の蒙古人達であったことになる。従って、当時、支配的地位にある蒙古人達が、ねだんかまわずいろいろの珍物をどんどん買うと言うことは、一般の蒙古人達の商人達に対する支払いが、どんどんふえることになる。つまり、一般の蒙古人達に対する課税額がますますふえることである。それは、一般の蒙古人達にとって、たえ難いことであり、いわば、生活の窮乏を強要されることである。ところが、当時は、支配的地位にある貴族乃至は領主達が、商人達から買う諸物資は次第に増加している。だから、当時、一般の蒙古人達の生活はますます窮乏したことが推測される。

しかし、納税の義務を負わされた一般の蒙古人達が、それで満足していたのではない。彼等も、やはり貴族乃至は領主達のように、豊かな生活を欲した。と言って、彼等は、商人達から諸物資を買うだけの財貨がない。しかしながら、たとえ財貨をもたなくとも、支配的な地位につけば、財貨を集めることもできる。そうすれば、商人達からも珍物は買える。だから、彼等の中には、支配的な地位につこうとする者があらわれる。そして、彼等同志の間で、互いに争う事態が生じた。

こう見てくると、次第に發達する当時の対外交易によって、支配的地位にある貴族乃至は領主達は、外来物質文化をとり入れて、次第に生活水準が向上する。ところが、一般の蒙古人達は、この交易の發達によって重税を課せられて次第に生活は困窮する。従つて、当時のこの交易によって、貴族乃至は領主達と一般の蒙古人達との間に、貧富の差が増大する。だから、そこに、一般の蒙古人達の不満が生じる。従つて、この不満は、当時の蒙古社会における内部的な矛盾のあらわれと言へるのではなからうか。

尤も、商業についての問題だけをとりえて、元朝の成立期における蒙古社会の内部的な矛盾が、完全に考察できるものではない。当時の蒙古社会の内部的な矛盾を完全にみきわめるためには、なお、他のもろもろの部門を考察し、検討しなければならぬが、それは、今後の研究にゆずり、ここに、この小稿を結ぶ。

- (1) 那珂通世訳註、成吉思汗実録(五八二頁)には「彼等は買物の価を高く払い、又ある商人より貨物を残らず買つたことを伝えており、又この貨幣は我に何の用かあらん」などと云つてゐる点から推測できる。
- (2) 納税だけではない。例えば、初期にあつては買納や又掠奪などによって得たものもある。
- (3) ウラヂミルツォフは、「皇帝と首領達が、彼等の財産から欲するだけを取つてゐる。」と伝えている。(ウラヂミルツォフ、前掲書、二六五頁)また、黒韃事略には、蓋韃人分管草地、各出差發、貴賤無一人得免者とある。
- (4) 例えば、黒韃事略には、至若漢地差發、每户毎下、以銀折絲綿之外、每使臣從從調遣軍、馬糧食器機救云々とある。また、ルブルクは、「ルテニア人が金銀を充分出さぬ場合は、女だろが子供だろが羊群を追いだすように草原に追い出し、家畜の番をさせてゐます。また更に別の所では、「カフホルムに支那人が沢山いますが、それが皆親の職業をつぎ、祖先伝来の仕事をしています。従つて、彼等は、大量の税を納めることができ、蒙古政府に毎日千五百イアスコットの銀(一イアスコットの銀は一〇マルク約五ポンドの銀に当る)や、ロヌモ酒や絹織物や食糧を納めてゐる。」と伝へてゐる。(The journey of William of Rubruck to the Eastern parts of the world, 1253-55; (ibid.), p. 94, p. 156) だから、彼等の支配権内にあるどの民族に対しても納税をせたり取りあげてゐた。
- (5) ウラヂミルツォフ、前掲書、八七頁、及び二六四頁—二六五頁。
- (6) ウラヂミルツォフ、前掲書、一六九頁。